

愛をめぐる断想

中村真一郎



愛をめぐる断想

© 1972

定価 480円

昭和47年 5 月10日 印刷

昭和47年 5 月20日 発行

著 者 中村真一郎

発行者 山 越 豊

印 刷 三 陽 社

発行所 中 央 公 論 社

東京都中央区京橋 2-1 郵便番号 104

＊愛をめぐる断想
目次

恋は隷属ではない 7

処女論 19

女は玩具ではない 31

嫉妬 この魔的なるもの 43

女性解放の一宿場 54

孤独からの脱出 66

純情恋愛と実用恋愛と 78

女は変容するか 90

金と愛の逆説的關係

102

男と女の優しさ

114

恋文のゆくえ

125

悪妻から悪女へ

137

快樂について

148

見えざる別れ

159

結婚について

170

裴頓
谷川晃一

愛をめぐ
る断想

恋は隷属ではない

今、二十歳を過ぎたばかりの読者は、こういうことを、一度は考えてみたことがあるのだろうか。

つまり、あなたのお父さんとお母さんとが若い頃に、毎日、男女平等について、また具体的には婦人の選挙権から、皿は夫婦で一日おきに洗うべきや否や、というようなことについて、真剣に熱心に議論をしているうちに、あなた方が生れたのだということ——

実際、今から四半世紀ほど前の青年の世代は、日本の歴史はじまって以来、最初に男女の平等について、ほとんど熱に浮かされたように——だから、今日、思い返してみると、それは涙ぐましいほど、美しい情景となつて甦ってくるのだが——情熱的に考え、語り、その実現のために身を捧げ、また苦しんだのだった。

かくいう私も、その青年のひとりであつた。そして、敗戦に続いて起こつたアメリカ占領軍の政策のなかの最大なるものは、農地解放と男女平等とであり、そうして私たちの世代は、一世代をあげて、そのアメリカ軍の押しつけてきた政策を、人類の進歩の方向を目指すものとして、熱狂的に歓迎し、古い世代の躊躇と曖昧さに対して、勇敢にその実現を

計ろうと試みることに、生きる喜びを感じていたのである。

だから、当時の青年にとっては、恋の語らいというものは、二人の給料を足せば食えるだろうとか、部屋をどうして手に入れようとか、——それらは当時においては、現代では想像もつかないほど、切実な問題であったにもかかわらず——そういうことよりも、二人が共同生活をするとしたら、その生活をいかに男女平等のレイルのうえに乗せるかという、深刻で新しい哲学的問題及び、その実践の細部についての話し合いだったのである。「男女平等」というものについて、女性が主張し、男性が反対するという、先進国における古典的形態ではなく、私たち日本の四半世紀以前の青年は、それを主張する女性たちを、男性たちが使命感を抱いて、励ましつづけることを以って、恋の睦言だと信じていたのである。

たとえば、こういうことがあった。

ある進歩的出版社の女性編集者が、当時、私のところにやって来て、新婚^{そうそう}匆々、自分会社をやめなければならなくなり、従って結婚生活の経済的基礎が一度にくつがえってしまつたと、涙ぐんで訴えた。

彼女は当時、——これも日本の近代史はじまって以来、最初の新現象であつたが、社内結婚という、同僚同士の恋愛による結合であり、結婚後も、夫婦とも同じ職場で働きつづけるという実例であつた。

今日の青年たちには信じられないかも知れないが、戦前の日本にあつては、同一職場内

における男女の恋愛は、徳川時代の「封建的」道德の残留物である、「不義はお家の法度^{はつと}」という思想によって、上役からも同僚からも白眼視され、軽蔑され、もちろん、女性はそのために退職しなければならず、男性の方も出世コースから見離される危険があった。いや、社規で職場結婚を正式に禁止している会社もあったのである。

そういう封建的な社規に対して、その廃止のために戦うのも、当時、新しく再建された労働組合の男女平等闘争の、大きな課題のひとつだった。——それにしても、二十五年前には、社会の凡ゆる問題の善悪は、青年たちには明確に見えていて、そして悪しきものはすべて、「封建的」という形容詞によって、非難されたものだった。私たちの世代にとっては、「封建的」という形容詞は、今日、何と懐かしい響きを持っていることだろう。そうして、一体、いつ頃から、この言葉は、子供が親を罵倒したり、組合が経営者を非難するのに使われなくなったのだろうか。それは多分、朝鮮戦争によって、アメリカ占領軍の日本統治方針が右向きに変更された頃からだったろうか。……

思わず私の筆は回想的になって脱線したが——そうした職場結婚が最も祝福されるはずの進歩的出版社の女性編集者は、意外にも組合の婦人部の集会によって、吊し上げをうけ、自己批判を要求させられたのに、それを拒絶したために、退職の余儀なきに至ったのだった。

その出版社においては、経営者側も決して「封建的」ではなかったのだから、上からの圧力というようなのは、全く考えられなかった。

彼女の涙ながらの告白によると、彼女は組合の婦人部の集会で、新婚勿々の自分がいかに幸福であり、毎晩、彼のために布団を敷くということが、いかに生き甲斐に感じられるか、ということ、職場結婚の成功の一例として報告したのだった。

ところが、それが物議をかもしうことになった。最も急進的な組合員のなかから、毎晩、彼のために布団を敷くというような、そうしてその間、亭主は煙草をふかして夕刊を見ているような、封建的な夫婦関係は、まことにけしからん。布団はすべからず、男女で一晩おきに敷くべきであるという批判が提出され、そして、その意見が正式に採用されて、この可憐なる新妻は危機に立たされてしまったのだった。しかし、彼女は断乎として、組合の勧告をしりぞけ、そして辞表を提出したのである。

彼女は私の顔を見上げながら、辞職の理由をこう説明してくれた。

「私、彼が好きで好きで、仕方ないんです。彼のために何でもしてあげたいんです。その喜びを、どうして他人が奪おうとするんでしょう。彼を愛することが、どうして封建的だということになるんでしょう……」

私は感動し、そして男女の平等と愛というものの調和の複雑さに、改めて思いを致したのだった。

それから二十数年たって、それらの男女平等運動のなかから生れてた子供たちが、自ら恋をし結婚をする時代になった。

そして驚くべきことには、若い彼ら彼女らのほとんどすべては、親の世代との断絶を公言している。

親たちの青年時代の理想そのものを、若い子供たちの世代は否定しようとしているのか。それとも、親たちにとって新しい理想であったものが、今日では常識化して、さらにその先に進もうとする子供たちは、親たちのかつての理想が、幼稚で時代おくれになってしまったと感じているのか。

私を見るところでは、二十数年前の理想そのものが、今日の青年の眼に、愚劣に感じられるようになったのではない。ただ、二十年前の青年は、父となり母となることによって、より現実的本能的になって、父親は男の生き甲斐として、仕事に熱中し——今日の日本の中年男が、仕事気狂いになっているというのは、世界の世論である——そして精神的にも肉体的にも、夫から放置された細君は、息子や娘やに、青春の情熱の再現を見ようとして熱中している。

そこで当初においては、男女平等の理想が、しばしば男女の能力の混同という危険におちいりかけていたのが、つまり男がスカートをはき、女がズボンをはくというのが、その理想の実現であるかのように見られていたのが、今日では親の世代となった彼らは、全く別のワールドで生きるということになり、その結果、むしろ男女の間の断絶が、社会を支配するようになってきているのではなからうか。

それにしても、母親の子供に対する執念は、今日、全く恐ろしいほど本能的に強烈であ

って、子供が成人してもなお、母親は子供を独立させたがらない。教育、マ、マという現象は、仕事に疲れて家庭に戻った亭主たちを、さらに疲れさせている。

私自身、子供が小学生のとき、父親学級というものに引っぱり出されたことがあったが、せっかくの日曜を、女房の代りに学校へ駆り出された亭主たちは、今後いつさい、子供の教育は学校及び母親において責任を持つべきで、父親の方までその教育熱が伝染してくるのは、やめにしてほしいという決議を行なって、解散したのだった。

そういう訳で、親と子の断絶、というのは、母親と息子、また時には父親と娘の間のきずなの、史上空前の強固さのまえで、単なる言葉に過ぎないのではないかと思われもする。警察学校の卒業式にも、母親の参列する時代である。多分、地下の泥棒学校の卒業式にも母親たちが参列しているだろう。だから、間もなく、逃げる泥棒も、追いかける警官も、両方とも「お母さん！」と叫ぶようになるのではなからうか。

また娘を結婚させることに、精神的に耐えがたい思いをし、泥酔したり入院したりする父親も激増している。親父たちは自分の娘が若い男と平等の家庭を作るのを、青年時代の自分の理想の実現だと祝福する代りに、娘をその若僧に奪われた、盗まれたという認識によって、また娘に裏切られたという実感によって、悲嘆にかきくれ、そしてその青年を憎むのである。

このままでいくと、やがては、かつて姦通罪という法律が、妻の浮気を罰するために存在したが、そして、それは封建的であるという理由によって、戦後、廃せられたが、今度

は主として父親たちによって構成されている国会は、婦女誘拐罪の適用の拡大、娘を恋におちいらせた青年を、それによって法的に規制しようという議案の上程を、大真面目に考慮しはじめかねないのである。

これでは一体、男女平等の理想も、世代の断絶もどういうことになってしまっているのか？

一方、私もその一員である中年男たちは、若い男が結婚と同時に女房に逮捕監禁されてしまうという現状について、いっせいに嘆かわしく思っている。

盗まれたはずの娘は、妻となり母となるに及んで、ゲリラ戦に転じ、いたいけな幼児を人質にとって、家庭を占領し、ホーム・ジャックを実行して、亭主を脅迫して家庭に縛りつけている。

最近も、ある会社で、急用のために重役が日曜出勤し、若い社員に臨時に出勤するように電話したところ、「公私を混同しないで下さい」と、その青年に断わられて、ショックを受けたという記事が、新聞に載っていた。また、ある雑誌の編集長は、仕事のおくれを取り戻すために、自分といっしょに残業することを若い社員に命じたところ、「先約があるので」と拒絶された。そして、その先約というのは、恋人とのデートであったというのである。

若い世代にとっては、公私、という觀念が、前の世代と逆転して、家庭が公、職場が私、

となつたように見える。

こうした風潮は中年男たちにとって、全く男性の卑小化としか感じられず、彼らは集つて酒を飲むたびに、このような若い男女のマイ・ホーム主義化のために、やがて日本は国際競争から脱落してしまふのではないかと、国家の将来を憂うるのである。そして二十五年前に戦死した友人たちの霊のためにも、自分たちの指導力の弱さを自己批判して、悪酔いするのである。

——しかし、何事にも、盾の両面というものがある。

今日、ごく自然に肩を組み、腕をからませて、愉しそくに街頭を濶歩している青年男女の方では、中年男の仕事への献身を、封建的な滅私奉公思想の無意識的継続と見て、嫌悪を感じているのかも知れないのである。

国家乃至役所乃至会社が、どうして公であり、ここに確実に生きているひとりひとりの自分が私であるのか。そういう古い感覚こそ、人類が長い間、戦つて獲得した、近代的な「人權の基本的自由」というものに対する反動的挑戦ではないか、親たちの世代は戦争の犠牲者だと自ら称しながら、ちょうど軍歌に郷愁を感じはじめているように、滅私奉公という戦時中のスローガンに人生観を支配されているのではないかと、若い世代は考えているのかも知れないのである。

四半世紀前の青年男女は、正に「観念的」であつた。しかし、その子供たちの世代は「感覚的」なのを特徴としている。